

「歴史教育における博物館活用」

—令和3・4・5年度を振り返る—

横浜緑園高校 本田 六朗

はじめに

日本史研究推進委員会では毎年数回、県立歴史博物館(以下、歴博と称する)の学芸員と共同で研究活動を行っている。学芸員が高校教員向けに研究発表を行うこともあるが、逆に学芸員が高校教員の研究発表に出席して、協議に参加される場合もある。私は令和3年度から5年度にかけて、学校現場でどのように博物館資料を活用するかということについて、学芸員の武田周一郎さんのご協力を得ながら、研究発表を行ってきた。令和6年3月5日の春季研究大会研究発表では、その三年間の内容をまとめて、ご報告をさせていただいた。以下の内容は、三年間の発表やそれに付随して調べた内容をまとめたものである。

1 令和3年度研究発表 「神奈川県鳥瞰図」と昭和前期の社会



資料1 神奈川県鳥瞰図 (吉田初三郎作、神奈川県立歴史博物館・ゼロックス提供)

神奈川県鳥瞰図(以下、鳥瞰図と称する)は、昭和7(1932)年に、鳥瞰図絵師の吉田初三郎が作成したものである。これは、1923年の関東大震災から復興を遂げつつある神奈川県を外にアピールするため、神奈川県観光連合会が吉田初三郎に作成を依頼したものである。実際に見ればわかるが、縦80cm横420cmと非常に大きく、迫力満点である。これを授業で活用するために、どのような方策が考えられるだろうか。



資料2 神奈川県鳥瞰図の検閲印



資料3 神奈川県鳥瞰図の横須賀、戦艦三笠

この鳥瞰図を鑑賞するポイントの一つは、検閲印の存在である。これは神奈川県観光振興のために作成されたものであったが、東京湾要塞司令部および横須賀鎮守府の検閲印が押されている。歴博の学芸員、武田周一郎氏によれば、三浦半島の要塞地帯が含まれており、関係機関からの許可が必要であったということのようである。しかし鳥瞰図をよく見ると、デフォルメされた形ではあるものの、追浜飛行場（横須賀海軍航空隊）、横須賀港および軍艦三笠、横須賀軍港駅（現在の京急汐入駅）など、軍事関連施設の所在ははっきりと、丁寧にキャプション付きで描かれている。検閲というのは普通、軍などに都合の悪い情報を秘匿するはずのものであり、軍港などが明示された形で認可されたというのは、理屈に合わないように思われる。これはいったいどういうわけであるのか、生徒に考えさせても面白いのではないか。実は、鳥瞰図は「作成に関与した人間の意図が表れている」のである。鳥瞰図が観光振興のために作成されたことは先に述べたが、軍事施設の情報にデフォルメされた形であれ残されたというのは、それが「観光資源としてのアピールポイントとして判断されたから」ということであろう。

このことについて、例えば当時の修学旅行と組み合わせて考えてみるのはどうだろうか。修学旅行は 1880 年代後半に始まったと言われているが、当初は日帰り遠足のような形が一般的であり、現在のような宿泊を伴うスタイルになったのは、交通機関が発達する 20 世紀以降であるといわれている。神奈川県は東京に隣接しており、他県の学校からは東京と神奈川を一つのコースにまとめることも多く行われたようである。1911 年に信州の中学生が記した修学旅行期は、「東京で帝都の偉容を体感し、横浜では外国文化に接し、鎌倉では古都の伝統を知り、横須賀では海軍精神を学んだ」と記している。これらのことから、当時三浦半島に存在した軍事関連施設は、秘匿するべきものではなくて、大日本帝国の偉容を見せつけるための観光スポットだったと考えられるのではないだろうか。



(左) 資料 4 京浜修学旅行日記（横浜中央図書館蔵）

(右) 資料 5 平塚駅周辺と「湘南パークウェイ」

また、平塚駅のあたりを見てみると、湘南パークウェイ（湘南公園道路）が描かれている。これも鑑賞ポイントの一つである。湘南パークウェイは当時の山県治郎知事（任 1929-1931）が特に注力した事業の一つであり、湘南地方への移住者増および、対外観光アピールのために計画された開発事業である。これは、片瀬龍口を起点とし、大磯の国道（現在の国道 1 号）に合流する幹線道路を建設するという計画であった。鳥瞰図を見ると、確かに片瀬から大磯まで道路を表す緑の線、およびその線上に乗用車が、さらに相模川の河口に湘南大橋が描かれており、何とも楽しげな雰囲気を醸している。しかし実は、この鳥瞰図が描かれた時点では湘南パークウェイは完成しておらず、起工して間もない状況であっ

た（1931年8月起工、1936年開通式）。それにもかかわらず1932年完成の鳥瞰図にはあたかも完成したかのように描かれている。なぜだろうか。武田氏は「湘南公園道路は山県知事が主導した事実を象徴するものとして描かれた」と述べられているが、どうやら当時の知事に付度して「ないはずのものがある」ように描かれたようである。

このように、鳥瞰図は一般的な地図とは違い、「作成に関与した人間の意図が表れている」興味深い地図資料である。インターネットで検索すると、神奈川県以外にも様々なヴァージョンをみることができ、手軽に授業で利用することができる。生徒に提示する前に、資料が作成された経緯をふまえておくと、より効果的に活用することができるだろう。

2 令和4年度研究発表 「国際秩序の変化や大衆化と私たち」をどう教えるか

令和4年度より、新科目として歴史総合がスタートした。この科目の4つの大項目のうち、「国際秩序の変化や大衆化と私たち」で取り扱われる時代は、第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけてである。戦争への緊張が高まる昨今、世界大戦の起こったこの時代について学習することは、大きな意義があるだろう。この時代の資料として、どのようなものを、どのように活用できるだろうか。



（左から）資料6 SS-1900、資料7 月刊オートバイ 昭和二年九月号、
資料8 オートバイの内容（女性モーターサイクリストの紹介）、資料9 家の光
※資料6・7・8は歴博所蔵

令和4年度の発表で取り上げた資料は二種類ある。一つ目は電気冷蔵庫、もう一つはバイク雑誌である。電気冷蔵庫については、SS-1900という、芝浦製作所が1938年に発売したものである（資料6）。発売当時は電気冷蔵庫の一般家庭への普及率が0.1%程度だったようであるから、相当な高級品であったろう。バイク雑誌のほうは、現在も刊行されている「月刊オートバイ」の昭和2～4年のものである（資料7）。昭和の初期といえば、太平洋戦争へと突き進む、暗くて内向きなイメージを抱きがちだろう。しかしこのバイク雑誌を開くと、非常に明るく元気な時代という印象を受ける。アメリカやイギリス製のオートバイが、バイカーファッションや欧米の先進文化（資料8）とともに堂々と紹介されており、豊かな欧米に対する当時の憧憬がはっきりと見て取れる。

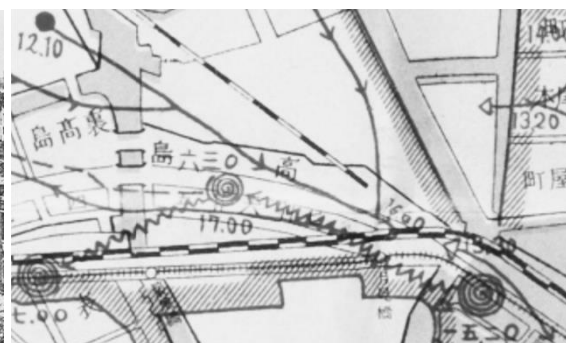
この2つの資料から見えてくるのは、富裕層の存在である。先に述べた通り、電気冷蔵庫は販売開始当初には超富裕層向けの商品であり、一般の家庭は購入することなどできな

かった。これはオートバイについても同様のことが言える。昭和2年～4年の月刊オートバイを読むと、現代のバイク雑誌のように値段表記がされていないことに気がつく。実はこの雑誌は、現在のように商品のカタログ的な要素はなく、庶民の手の届かないことを前提としたものであったようだ。これらのことから私は、これらの資料は「昭和前期の格差」について考えるための教材として活用できるのではないかと考えた。

ここで、井上寿一の『戦前昭和の社会 1926-1945』について触れよう。この本では農村雑誌『家の光』が紹介されている。これは、官製組合である産業組合中央会が、農村の暮らしの改良・進歩を目的として発行した雑誌である。ここで詳しくは述べないが、これは官製の雑誌でありながら、昭和初期に議会政治批判や資本主義批判を展開しており、農村から都市住民への、また一般大衆から富裕層への、不信感のようなものが見て取れる。また、井上は『ホームライフ』という雑誌も紹介している。これは1935年に大阪毎日新聞と東京日日新聞が、「写真文化」と「商品文化」をキーワードとし、都市の若い女性を購買層として作られた雑誌である。都市の裕福な若い女性がお洒落な格好で優雅な生活を楽しむ写真が多く紹介されている。その中でも特に目を引くのは、1938年の8月の「銀座を闊歩する女性」という写真である。1938年といえば、日中戦争の最中であり、4月には国家総動員法が公布されているし、前年の生ゴムの統制に始まり、国民生活の国家統制が本格化しているはずである。しかしこの写真からは、そのような戦時中のイメージは全く伝わらない。豊かな生活を享受する都市生活者と、そうではない一般大衆、貧しい地方・農村との間の溝のようなものが、これらの資料から見えてくるのではないだろうか。

3 令和5年度研究発表 関東大震災と横浜の地域史

関東大震災からちょうど100年にあたることもあり、令和5年度の博学連携のテーマは「関東大震災と横浜の地域史」とした。昨年までとは違い、様々な資料を盛り込んだワークシートを作成し、授業実践を行い、その結果について研究討議を行うことにした。ワークシートには写真資料、地図資料、文字資料、表資料を盛り込み、資料活用を重視した。



(左から) 資料10 ジャックの塔・横浜市開港記念会館周辺、資料11 横浜正金銀行周辺、資料12 横浜市火災延焼状況図の一部(高島周辺)、いずれも歴博所蔵

写真資料は、歴博所蔵のものをいくつか使用させていただいた。歴博から提供していただいた資料の中でも特に興味深かったのは、「横浜市火災延焼状況図」(資料12)である。これは昭和2年に発行された神奈川県震災誌の付録であるが、震災によって引き起こ

された火災の延伸状況について、焼失区域、出火の時間、火元、火災旋風の起点及び進路など、様々な情報が書きこまれている。武田氏からは「地理総合の授業などで、現在のハザードマップと照合するなどすると効果的ではないか」というアドバイスをいただいた。横浜の地域史・災害史の学習において、非常に面白い資料である。

文字資料としては、これも武田氏からご紹介いただいたのであるが、『関東大震災 女学生の記録』という冊子を活用させていただいた。これは、フェリス女学院の生徒による被災の記録集であり、当時の様子が生々しく描かれている。中には朝鮮人虐殺に関連するような記述もあり、生徒に読ませたところ、「先生、こんなことが本当にあったの？」というような、素朴な反応を見せる生徒もいた。関東大震災について深く学んだことのない生徒にとっては、横浜で火災の被害や人種差別・虐殺が広がっていたという事実は、かなりインパクトがあったのではないだろうか。

令和五年度の研究発表を終えて感じた課題は、関東大震災における朝鮮人および中国人虐殺に関して、授業で取り扱うさじ加減が非常に難しい、ということである。今回、ワークシートには先述のフェリス女学院の被災記録集に加え、後藤周著『それは丘の上から始まった』から資料を引用した。私の個人的な意見ではなく、実際の資料に基づいてこの問題を考えられるように配慮したつもりであった。しかし、生徒の感想を読むと「かわいそう」とか「よくないことである」といった表面的な回答がほとんどであり、「なぜそのようなことが起こったのか」というような深い理解には至らなかったようである。では、もっと詳しい資料をたくさん与えれば、この問題に関する理解が深まるだろうか。ただ、この問題に関しては生徒の価値観を侵害したり、教員の歴史認識が前面に出すぎてしまったりするようなことが無いように、細心の注意を払わなければいけない。さらには、生徒の家庭が実際の被害にあっている可能性などもある。関東大震災における朝鮮人・中国人虐殺について、どの程度まで、どのように資料を活用できるのか、今後の検討課題である。

おわりに

博学連携を三年間実施させていただき、私自身、資料に対する理解が非常に深まったことを実感している。特に面白いと思ったのは、「資料イコール歴史的事実ではない」ということである。今回挙げた資料の中では特に鳥瞰図に顕著であるが、作成者の思いや事情、立場などによって、恣意的に内容が操作されるということを念頭に置いて、資料を見なければならぬ。歴史総合に限らず日本史探究・世界史探究においても、資料活用の技能を高めることはますます重要になっていくだろう。それは生徒だけの問題ではなくて、それを提示する教員の技量の問題でもある。授業内容を向上させるためにも、博学連携の取り組みをさらに深めていきたい。

《参考文献》

武田周一郎「「神奈川鳥瞰図」の作成過程と利用の実態」神奈川県立博物館研究報告 2019

井上寿一「戦前昭和の社会 1926-1945」講談社現代新書 2011

フェリス女学院「関東大震災 女学生の記録」フェリス女学院 2010

後藤周「それは丘の上から始まった」ころから出版 2023